

学位論文審査結果の要旨

博士課程 甲乙	第 号	氏 名	濱田 剛臣
審 査 委 員		主 査 氏 名	河上 洋
		副 査 氏 名	若川 善隆
		副 査 氏 名	日高 勇一
<p>[論文題名] Neutrophil-to-Lymphocyte Ratio and Intratumoral CD45RO-Positive T Cells as Predictive Factors for Longer Survival of Patients with Colorectal Liver Metastasis after Hepatectomy</p> <p>[要 旨] 大腸癌肝転移切除例に対して、腫瘍免疫学的な予後予測因子の解析を後方視的に検討した。全身的な免疫応答因子の因子は modified Glasgow Prognostic Score (mGPS) と Neutrophil Lymphocyte Ratio (NLR)、腫瘍局所的な免疫応答の因子の解析は切除標本の免疫染色を主体として予後との比較検討が行われた。</p> <p>全身的な免疫応答と予後の多変量解析により、肝外転移の有無と術前 NLR が独立した予後因子として抽出された。生存解析でも肝外転移の存在と NLR 4.1 以上が有意に予後不良であった。腫瘍局所の免疫応答因子の解析は、生存解析において腫瘍内部の CD45RO 陽性リンパ球の発現が多い群が有意に予後良好であった。</p> <p>本研究結果は、NLR 4.1 以上が予後不良因子として抽出された肝転移例では宿主免疫反応が重要な役割を果たしている可能性が示唆された。</p> <p>学位審査時の質問事項として、主査および副査より、肝転移巣のみならず原発巣での検討の有無について、想定されうる差異について、免疫染色の肝転移巣の具体的な検索部位について、全身免疫応答の結果である NLR と局所免疫応答の結果である腫瘍浸潤リンパ球についての関連性やその想定されうる機序について、組織由来の生細胞の FACS による定量的検討の有無について、術前のサロゲートマーカーになり得るのかについて、そのために必要な検索について、今後の応用はどのように考えているのかについて、今回の研究の将来的な展望について、本研究の限界について、などの質問があった。これらの質問事項に対して、妥当な回答が得られた。</p> <p>以上より、学位論文に値すると判断した。</p>			

学力確認結果の要旨

論文博士 乙	第	号	氏 名	濱田 剛臣
審 査 委 員			主 査 氏 名	河上 洋
			副 査 氏 名	若川 善隆
			副 査 氏 名	日高 勇一
[要 旨] 申請論文の内容及び関連領域について口頭で試問した結果、学位を授与するに値する学力を有するものと認定した。				